

スポーツ後のビールはなぜうまいのか —スポーツと「集い」について考える—

清原 泰治

(高知女子大学文化学部教授)

もうずいぶん昔の話だが、高校時代、私はラグビー選手だった。昭和54年、全九州高校選抜チームが2度招集され、春には高校韓国一のチームと、秋にはオーストラリアのニューサウスウェールズ州高校代表チームと試合をした。私は控え選手で、ゲームには出なかったが、ゲーム後のレセプションには出席させてもらった。そこにはもちろんアルコールはなかったが、バッジを交換するなどして、楽しい一時を過ごしたことを覚えている。

スポーツでは、ゲームのあとに、こういったレセプションや交流会があり、あるいは仲間が集まる宴会がセットされていることがよくある。スポーツの後のビールがうまいのは、それはのどが渴いているからかもしれないが、今回はそういう関心ではなく、なぜ、スポーツの後に人は集うのかという視点から、ビールのうまさの秘密(ここでは筆者の個人的な好みから、アルコール類を代表する存在として「ビール」と表現し、「アルコールが存在する集い」の象徴とする)を探ってみたい。

* * * * *

1700年代のイギリス。『英国社会の民衆娯楽』(Robert W. Malcolmson著、川島昭夫他訳、平凡社刊、1993年)には、パブでの過ごし方がかなり詳しく描かれている。

パブには一日の労働を終えた男たちがやってきて、憩い、語り、酒を酌み交わしていた。そこにはトランプが置かれていたり、あるいは雑誌のようなものもあったようである。ダンスをする者もいたし、経営者が用意した道具を使ってゲームに興じる者もいた。ゲームとは輪投げ、シャッフルボード(特別の卓の上で金属の重りを突く玉突きに似たゲーム)、スキットル・グラウンド、ナインピン・アレー(ボウリングの一種)などであった。パブの客たちはこのようなゲームに興じながら、酒を飲んでいたのである。

また、パブの経営者たちは、スポーツに集まる群衆が、商売に有効であることを知っており、フットボールやクリケット、レスリングなどの試合を主催することもあった。それらの試合について、新聞広告が出ることもあったという。

* * * * *

1800年代のドイツでは、体操クラブが発展していた。『近代ドイツ・スポーツ史Ⅱ 社会・学校体操制度の成立』(成田十次郎著、不昧堂出版刊、平成3年)には当時のドイツのスポーツクラブの様子が、実に生き生きと紹介されている。

興味深いことの一つは、体操クラブの活動場所である。1859年1月1日現在の全ドイツの室内体操場に関する調査によれば、室内体操場を利用している体操クラブが51、ダンス場や納屋を利用しているのが127クラブ、施設なしが35クラブであった。ダンス場や納屋の区分には、馬場、車庫、納屋、劇場、ビール倉、居酒屋などが含まれていた。そういう場所で、週2～3回、夜7時か8時から、1～2時間、器械運動(鉄棒、鞍馬、平行棒、登はん、跳躍運動)などをしていたらしい。居酒屋で机やテーブルを片付けて体操の練習をし、それが終われば机を元に戻してビールを飲み、大いに語り合うという光景は容易に想像できる。

また、これらのクラブは休日などに遍歴に出かけたり、体操祭を開催したりしたが、これらのイベントには「宴」がつきものだったようである。例えば、1863年8月1日～5日に2万人が参加して開催された第3回ドイツ体操会連合ライブチヒ大会の報告書には、「夜は夜で、ホテルや酒場には、それぞれの地域の体操家や大学生たちが集まって遅くまで氣勢を上げていたのは、毎夜のことであった。」(同上、179頁)という記述が見られる。昼間は素晴らしい体操の技を披露し、夜は集まって大いに飲み、語り合う。参加者たちは充実した時間を過ごしていたことであろう。

* * * * *

日本では、1900年前後から地域に運動会が普及し、やがてそれは祭礼化していく。その様子は、太宰治が『津軽』に描いた運動会の風景からうかがい知ることができる。

「まず万国旗。着飾った娘たち。あちこちに白昼の酔っぱらい。そうして運動場の周囲には、百に近い掛小屋がぎっしりと立ちならび、いや、運動場の周囲だけでは場所が足りなくなっただと見えて、運動場を見下ろせる小高い丘の上にまでむしろで一つ一つきちんと囲んだ小屋を立て、そうしていまはお昼の休憩時間らしく、その百軒の小さい家のお座敷に、それぞれの家族が重箱をひろげ、大人は酒を飲み、子供と女は、ご飯を食べながら、大陽気に語り笑っているのである。」(新潮社刊、1951年、166頁～167頁)

このような運動会の光景を目撃した太宰は「日本は、ありがたい国だと、つくづく思った。たしかに、日出づる国だと思った。国運を賭しての大戦争のさいちゅうでも、本州の北端の寒村で、このように明るい不思議な大宴会が催されて居る。古代の神々の豪放な笑いと闊達な舞踏をこの本州の僻すうに於いて直接に見聞する思いであった。」(177ページ)と表現している。

土佐の場合は、運動会のあと、地域の人々が集まって「お客」(宴会)をしていたことが多かったようである。「古代の神々の豪放な笑いと闊達な舞踏」は全国津々浦々で見られたごく当たり前の風景だったのだろう。

* * * * *

このように、洋の東西を問わず、スポーツと「ビール」(酒場・宴会・「お客」)は

関係性が深い。ではなぜ、スポーツの後に人は集い、酒を酌み交わすのか。

スポーツには人を集める機能がある。そして、スポーツを行う者も見る者も含めて、そこで体験が共有される。その後の酒席では、いろいろな話がなされるのだろうが、当然、その日のスポーツのシーンが話題になるのは間違いない。そうならば、酒席での「語り」は共有された体験の再生産になるのではないだろうか。そこから生まれてくるのは、人と人との「つながり」であり、「憩い」である。スポーツ後のビールがうまいのは、そういう人と人との触れあいの「滋味」も、大きく作用していると思う。